

中国に来て驚いたこと「ベスト3」(北京)

中国というと、人それぞれに様々なイメージがあると思う。さすがに人民服に自転車の波を思い浮かべる人はもう少ないだろうが、ニュースでドローンによる配達やAIの活用などを聞いても信じられる(信じたくない)人は多いだろう。

北京に来て8ヶ月が経ったが、中国に来て驚いたことを独断によりランキング形式で3つ挙げてみたい。

【第3位】顔認証

新疆ウイグル自治区の烏魯木齊(ウルムチ)に行ったときのこと。空港の保安検査場でパスポートを提出し、顔を照合し、荷物のチェックを行うのはまあ普通のこと。搭乗口では、搭乗券ではなく顔認証で文字通りの「顔パス」で搭乗手続きを行っていた。

顔を差し出すと、ゲートが開き自分の座席番号まで表示される仕組み。厳しいセキュリティが求められる搭乗手続きで顔認証を使うのは、技術に自信があるからか。身分証と顔を一致させてデータ収集し誰がどこに行ったかを記録している。自動販売機やコンビニの無人レジでの支払いにも顔認証は使われている。

【第2位】モバイル生活

中国はテンセントの微信(WeChat)やアリババの支付宝(アリペイ)などのキャッシュレス決済が浸透している。一応法律で現金を受け取らなければならないとなっているが、在住の日本人を含め財布を持ち歩かない生活に慣れている。また、仕事での連絡も都市間移動やビルの出入りの際に必要な健康管理プログラムも微信を使う。ファストフード店での注文と支払いは、携帯で行うのが一般的。ラーメン屋でも自分の席にあるQRコードを読み取り注文と支払いを行うと料理が運ばれてくる。日本で例えると、国民全員がSNSの機能をフル活用し、支払いもすべて携帯、仕事では名刺交換代わりに初対面の人もSNSのIDの交換、公的な連絡もグループチャットで行うといったところか。LINEの連絡先が27人しかいない私でも微信には300人以上登録、グループチャットのメンバーを含めると1,000人以上の繋がりがあ。微信にはInstagram的な機能もあるので、仕事関連の人や1回しか会ったことがない人の趣味や休日の様子を見ることにもなる。技術的には今の日本でもできるはずだが、日本人には心理的な面で抵抗が強く、なかなかできないだろう。

すべてをスマホで行う生活は、便利な半面、なくしたり、壊したりするとそれは即生活ができなくなることを意味する。



携帯電話に14日以内に訪問した都市名が表示され、入館時にチェックされる

【第1位】高鉄

中国版新幹線、高速鉄道のこと。新幹線は日本のお家芸であり、中国の新幹線は「事故が起きてもすぐ埋めてなかったことにするもの」という穿ったイメージがあったが、素直に驚いた。

まず、路線が国内に縦横無尽に巡らされ、列車ごとに行く方向も路線も停車駅も異なるということ。北京からだ

国内主要都市はだいたい乗り換えなしで行ける。運行も数分間隔であり、遅延も少なく日本とも変わらない。駅は空港のように大きく、入場するにはセキュリティチェックもある。完全指定席で列車ごとに改札口が異なるので、乗り方も飛行機みたいだ。ホームで別の列車に乗り換えることはできない。時速 350km で走るので広い中国大陸も狭くなる。北京ー上海間 1,300km が最速で4時間 18 分。チケットはネットで購入でき、改札口に身分証やパスポートをかざして入るので紙の切符は不要。改札は顔認証機能もあるので、他人の身分証では乗ることが出来ない。

ちなみに4位はシェア自転車、5位はトイレを選びました。



高鉄路線図の一部。この路線の全部が高速鉄道



列車ごとに改札口が異なり発車3分前に入場が締め切られる



中国の鉄道駅は空港のようだ。北京朝陽駅



やっぱり新幹線に似ている

(中国日本商会 事務局長 松岡 鉄也)

日越両国関係と COVID-19 下におけるベトナム（ハノイ）

◆日越両国関係

日越両国関係と言えば、多くの方は、古くはベトちゃんドクちゃん、最近では、ベトナム人技能実習生のことを思い浮かべる方が多いだろう。日本で働く外国人 172 万人の内、ベトナム人が 44 万人を占め、最も多い国となっている。中国との領有権問題等で、安全保障上も歩調が合い、共産圏の中では珍しく、日本の戦略的パートナーとして互惠関係にある。昨年 10 月には菅首相就任後の外遊先として、安部前首相と同様に、ベトナムが最初の国となった。

日越両国関係の歴史は古い。8 世紀に遣唐使として唐の国へ留学した阿倍仲麻呂は、唐王朝の官吏となり、当時、唐の支配下におかれていたベトナム北中部を治める安南都護府（現在のハノイ市）の長官として派遣された。

その後、ベトナムは 10 世紀に独立国となり、13 世紀には蒙古がベトナムに進攻したが、チャン・フン・ダオ（TRAN HUNG DAO）将軍率いるベトナム軍が蒙古軍に壊滅的な打撃を与えたことで、蒙古は日本への 3 回目の進軍ができなくなり、日本が救われたとも言われている。ベトナムではチャン・フン・ダオ将軍はベトナムを救った英雄の一人として、現在でも、ハノイ市内には、同将軍の名前を冠した通りが存在している。



チャン・フン・ダオ将軍の名前の付いた通り

17 世紀には、朱印船貿易の相手国として一番取引が多かったのがベトナムとされている。ベトナムからの輸入品は主に生糸であり、日本の貿易量の約半数を占めたとされている。

第 2 次世界大戦中には、日本軍は、フランス領となっていたベトナムに進駐し、終戦まで実質的支配下に置いた。大戦後、ベトナムはフランスからの独立戦争となり、残留した元日本兵や軍属 600 名程度がベトナム軍への支援を行った。

◆新型コロナウイルス下におけるベトナム

新型コロナウイルス（以下「コロナ」）に対して、ベトナムは、いち早く水際対策を強化し、感染拡大の兆候があれば、素早く対象地域をロックダウンし、感染源を追跡・特定、隔離を徹底することで、抑え込みに成功してきた。コロナ抑え込みに成功した国として、オーストラリア、台湾、ニュージーランドといった国が取り上げられることが多いが、ベトナムはこれらの国々とは違い、国境線は地続きの3か国と接し、人口も1億人近くと多いにも関わらず、累計感染者数8,580名、死者53名（2021年6月6日現在）と、オーストラリア（30,173名、910名）、台湾（10,956名、224名）、ニュージーランド（2,682名、26名）と同等の実績となっている。

市中感染者が発生したら、厳しい社会隔離を行い、完全に抑え込めた後は、大胆に、経済・社会生活を平常に戻すというメリハリの付いた対策を行った結果、2020年は、経済成長率2.91%を実現している。

一方で、2021年4月下旬からベトナムでは感染の第4波が拡大している。バクニン省（首都＝ハノイ市から北東に40km）やバクザン省（首都から北東に120km）において日本企業の工場からもクラスターが発生し、ハノイを含む北中部全域に感染が広がっている。バクザン・バクニン省では多い日には1日で300名を超える感染者が出ており、省内の全ての工場の操業が禁止された。両省とも日本企業を含む外国企業が多く工場進出をしており、自動車や電子機器などグローバルなサプライチェーンに影響が出始めている。こうした事態を受け、弊所では、両省政府に対して、工場操業再開のための条件の明確化や条件の緩和を要望した結果、両省政府から条件の明示や緩和条件を示されているが、まだ十分なものではなく、引き続き予断を許さない状況である（6月6日現在）。

また、ベトナムでのワクチン接種は遅れており、現状の接種率はベトナム政府が接種対象とする7,500万人の内1%に留まっている。今後、より感染力の高いコロナが次々と発生した場合、いままでの対策では十分に機能しなくなるリスクがあり、コロナ感染対策と、経済発展の両輪を目標とするベトナム政府としては、工場がクラスターにより停止するような事態を防ぐためにも、計画を前倒してワクチンを確保する必要性に迫られている。こうした中、日本政府が外国への直接のワクチン提供先として、台湾に次いでベトナムにも支援を表明したことは、在越日本社会にとって朗報である。

（ベトナム日本商工会議所 事務局長 八田 城之介）